『古事記』カガナベテ再考

山口佳紀

はじめに

『古事記』中巻の景行天皇の条には、一般に「筑波問答」の名で知られる問答歌が記されているが、その答歌の中には「かがなべて」という歌詞が含まれている。この歌詞の意味については「日々並べて」の意であるとする宣長説があり、既に解決済みのものとして扱われることが多い。

しかしながら、右の宣長説に看過しがたい疑問があることは、従来注意されていない。これについては、本稿の筆者が校注に参加した新編日本古典文学全集『古事記』（神野志隆光との共編）も例外でなく、「日々並べて」の意として、簡単に片づけてしまった。ここに改めて、この歌詞の意味を考え直してみたいと思う。なお、『日本書紀』にも同じ歌が出て来ており、前後の文脈は多少異なるが、この語句の意味を考える上では特に問題が生じないので、本稿では『古事記』の本文を中心にして検討することにする。

一

まず、この歌が出て来る前後の文章を新編日本古典文学全集『古事記』の訓読文によって示すことにする。ただし、

問題の部分だけは原文の文字をそのまま記すことにする。

即ち、其の国より甲斐に越え出でて、酒折宮に坐しし時に、歌ひて曰はく、

新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる（二五）

爾くして、其の御火焼の老人、御歌に続ぎて、歌ひて曰はく、

迦賀那倍弖　夜には九夜　日には十日を（二六）

是を以て、其の老人を嘗めて、即ち東国造を給ひき。

さて、既に触れたように宣長は、この「かがなべて」を「日々並べて」の意であると説いた（筑摩版本居宣長全集第十一巻二四八ページ）。カは、フツカ（二日）・ミカ（三日）・イクカ（幾日）などのカで、日数を数える時にいう語であるとする。また、そのカはケナガク（日長）などという時のケに通ずるものであるという。この説は、一般の支持するところとなり、多くの注釈書はこれに従っている。

ただし、これには異論がないわけではない。日本古典文学大系『日本書紀』は、本文（上・三〇六ページ）では「日日並べて」とするが、補注（上・六〇一ページ）では、次のように述べている。

カガナベテは、日数を並べてと解するのが普通。カは、二日（フツカ）・五日（イツカ）のカ。日の複数だけを表す語（日本語では単複対立させうる語で、複数だけをいう語は他に例がない）。従って、カの転のケを用いて、ケ並べてという例はあるが、カカと重ねて使うのはおかしい。そこで、カガは、日日の意ではなく、「屈める」の語根カガであるとする説がある。それによると「屈並べて」の意であるとする。しかし指を屈め並べる意を「屈並べて」というか否か、確実には分からない。

カ・ケの両者について、これを「日の複数だけを表す語」と見るのは、大野晋の説に基づくもので、宣長がケ（日）をキヘ（来経）の約と考えたのに対して、大野は筑摩版『本居宣長全集』第十巻補注において、次のように記している。

ケはむしろ「カ」の転と見るべく、サカ（酒）→サケ、アマ（雨）→アメと同じ変化を経たものである。ここのカ・ケは、日の複数のみをいう語。かように、専ら複数だけをいう語は日本語に他に例がない。（五六一ページ）

また、同じく宣長が、フツカ（二日）より以上はすべて〜カというのに、ヒトヒ（一日）だけはなぜヒトカといわないのかという理由について、「未思得ず」と述べたことに対して、大野は次のように説明している。

カは、日数の複数のみをいう語であるから、ヒトカとはいわないのである。（同書五六一ページ）

カ（日）とケ（日）とが交替形の関係にあるという考え方はよいとして、このカ・ケが日の複数のみをいう語であるというのは、どうであろうか。大野自身も述べるように、「専ら複数だけをいう語は日本語に他に例がない」のであるから、ここに複数という概念を持ち出すのは、適当と思えない（こうした批判は、既に安田尚道「日数詞（下）」〈国語と国文学49巻3号、一九七二・三〉に見られる）。

仮に、ケが日の複数だけをいう語とする考え方を認めたとしても、「カの転のケを用いて、ケ並べてという例はあるが、カカと重ねて使うのはおかしい」という説明は、理解しにくい。語を反復させるのは、複数性をもたせるためである。もしカ（日）には既に複数性があるから、それを重ねてカガ（日々）という必要がないと言うのであれば、ケナラブ（日並）も、既に複数性のあるケ（日）は並べるまでもないということになりはしないか。

一日は、なぜヒトカでなくてヒトヒと表現されるかという点は、現在のところ説明できない。しかし、少なくとも、その点を根拠にしてケ・カは日の複数のみを表すとし、カガ（日々）と重ねることは不審であると説く見方には、賛同できない。

二

「かがなべて」のカガを「日々」の意と見ることの問題点は、別にある。

既に触れたように、カ（日）とケ（日）とは交替形の関係にあると見られる。そして、両者は単に交替形というのでなくて、有坂秀世の言う「被覆形」と「露出形」の関係にあると見なされる。

ケが露出形であることは、比較的認めやすい。

○君が往き　日〈気〉長くなりぬ　造木（やまたづ）の　迎へを行かむ　待つには待たじ（古事記・歌謡八七）

○一日こそ　人も待ちよき　長き日〈気〉を　かくし待たえば　ありかつましじ（万葉四・四八四）

○馬ないたく　打ちそな行きそ　日〈気〉並べて　見ても我が行く　志賀にあらなくに（万葉三・二六三）

○草枕　この旅の日〈気〉に　妻離り　家道思ふに　生けるすべなし（万葉一三・三三四七）

○青山の　嶺の白雲　朝に日〈食〉に　常に見れども　めづらし我が君（万葉三・三七七）

このケ（日）はケ乙類であるが、一般に被覆形のア列と交替する露出形のエ列は乙類であるから、この点でも問題がない。

一方、カ（日）の方はどうか。カ（日）が現れるのは、いずれも日数詞における助数詞としてである。

○近くあらば　今二日〈布都可〉だみ　遠くあらば　七日〈奈奴可〉のをちは（万葉一七・四〇一一）

○夜には九夜　日には十日〈登乎加〉を（古事記・歌謡二六）

○百日〈毛々可〉しも　行かぬ松浦道　今日行きて　明日は来なむを　何か障（さや）れる（万葉五・八七〇）

このカ（日）は語末に現れるから、一見露出形のようであるが、実はそうでない。有坂秀世は、「母音交替の法則について」（『国語音韻史の研究』増補新版七二ページ）において、同一語根が独立の名詞として現れる場合と、助数詞として現れる場合とによって、その末尾の音節に母音の交替が見られることがあるとして、次のような例を挙げている。

①トシ（年）―チトセ（千年）

②フネ（船）―ヤソフナ（八十艘）

③ツメ（爪）―ムツマ（六爪）
④ケ（日）―トヲカ（十日）
このうち①は、トセが被覆形であるという証拠がないから、別に扱うとして、②③④の場合、いずれも助数詞としての用法において被覆形が現れている。念のため、②③の例を掲げておく。
②種種雑物（クサクサノヒトモノ）、并八十艘（ヤソフナ）（前田本仁徳紀院政期点・十七年九月）
③熊が爪　六爪（むつま）〈无都万〉ろかもし　鹿（か）が爪　八爪（やつま）〈夜豆万〉ろかもし（琴歌譜・一七）
さらに、蜂矢真郷は、「助数詞被覆形の用法―名詞被覆形とク活用形容詞語幹とから―」（『日本文法　体系と方法』一九九七・一〇、ひつじ書房）において、類例として次を追加した。
⑤カヂ（梶）―ヤソカ（八十梶）「八十梶〈夜蘇加〉貫き」（万葉二〇・四四〇八）
⑥フシ（節）―ヤフ（八節）「八節〈耶賦〉の柴垣」（書紀・歌謡九一）
川端善明『活用の研究』（II二七・四〇ページ）に従えば、カ（梶）は露出形カヂ（梶）またはカイ（櫂）に対する被覆形、フ（節）は露出形フシ（節）に対する被覆形と捉えることが出来るからである。これらは、②③④の例に準じて考えてよいであろう。
なお、蜂矢はフタツ（二箇）などのツ（箇）と、ミソチ（三十）などのチ（箇）とを、被覆形―露出形の関係として捉えようとするが、これには無理があろう。用例から見て、ツ（箇）が被覆形的であるということが論証されないからである。
さて、カ（日）―ケ（日）を被覆形―露出形の対立と捉えた時、カガ（日）は名詞被覆形の反復ということになるが、名詞の反復に被覆形が用いられるというようなことは、あるのだろうか。これが、宣長説を採った時の疑問点である。
蜂矢真郷『国語重複語の語構成論的研究』（二三ページ）には、上代における名詞の反復例が、サキザキ（埼々）・トキドキ（時々）など、二六例ほど挙げられている。このうち、被覆形―露出形の対立をもつ名詞は、少数にとどまる。

①サチサチ（幸々）「山佐知母己之佐知佐知」（古事記・上）
②クニグニ（国々）「国々〈久尓具尓〉の防人集ひ」（万葉二〇・四三八一）
③カガ（日々）「日々並べて〈迦賀那倍弖〉」（古事記・中）

①サチ（幸）は露出形で、被覆形はサツヤ（狩矢）・サツユミ（狩弓）・サツヒト（狩人）・サツヲ（狩男）のサツである。従って、サチサチ（幸々）は露出形の反復ということになる。②については、クヌガ（陸）［北野本孝徳紀院政期点］を〈クヌ（国）＋カ（処）〉と考え、クヌ（国）をクニ（国）の被覆形と見なすならば、クニグニ（国々）は露出形の反復ということになる。これに対して、③カガ（日々）は、被覆形を反復していることになる。

ただし、これだけでは用例が余りに少ない。そこで次に、同書に載せられた『源氏物語』における名詞の反復例の中から、被覆形―露出形の対立をもつ名詞の例を抜き出してみる。なお、上代文献に既に見えるものは省略する。

○ウチウチ（内々）　被覆形ウツ（内）〈例〉ウツモモ（内股）［一字頂輪王儀軌音義］
○キギ（木々）　被覆形コ（木）〈例〉コダチ（木立）［万葉一七・四〇二六］
○コヱゴヱ（声々）　被覆形コワ（声）〈例〉コワヅクリ（声作）［黒板本金剛波若経集験記平安初期点］
○ツキヅキ（月々）　被覆形ツク（月）〈例〉ツクヨ（月夜）［万葉二〇・四四八九］
○ミミ（身々）　被覆形ム（身）〈例〉ムカハリ（身代）［岩崎本皇極紀平安中期点］

これらを見ると、いずれも露出形が反復されており、被覆形の反復と見られる例はない。さらに資料を広げるならば、平安時代には次のような例が見られる。

○カミガミ（神々）［更級日記］　被覆形カム（神）〈例〉カムカゼ（神風）［古事記・歌謡一三］
○クチグチ（口々）［蜻蛉日記］　被覆形クツ（口）〈例〉クツワ（口輪）［岩淵本願経四分律平安初期点］

これらも、同様に露出形の反復である。カガが「日々」の意であるとすれば、これだけが被覆形の反復ということに

なり、全く例外的と言うほかない。そして、それが例外的な形を取る理由は説明できそうもないから、宣長説は採用できないことになる。

三

「かがなべて」を「日々並べて」の意と見るについては、「並べて」の方にも問題がある。これは、動詞ナブ（並）の連用形に接続助詞テがついた形と解されているが、ナム（並）はあっても、ナブ（並）の語形はなかなか見いだせないからである。

上代におけるナム（並）の用例は、次のようなものである。

○浜も狭に　後れ並み〈奈美〉居て　臥いまろび　恋ひかも居らむ（万葉九・一七八〇）

○松の木の　並み〈奈美〉たる見れば　家人の　我を見送ると　立たりしもころ（万葉二〇・四三七五・防人歌）

○楯並め〈那米〉て　伊那佐の山の　木の間よも（古事記・歌謡一四）

○友並め〈名目〉て　遊ばむものを　馬並め〈名目〉て　行かまし里を（万葉六・九四八）

○馬並め〈奈米〉て　うちくちぶりの　白波の　荒磯に寄する　渋谿の　崎たもとほり（万葉一七・三九九一）

自動詞（四段）・他動詞（下二段）ともに、ナムの形である。ナブ（並）の例は、次の「なべ」がそれであると一般に言われている。

○かなし妹を　弓束なべ〈奈倍〉巻き　もころ男の　事とし言はば　いやかたましに（万葉一四・三四八六・東歌）

しかし、新編日本古典文学全集『万葉集』頭注には、第二句について、次のように記されている。

ユヅカはユミツカの約。弓を射る時に左手で握る部分。弓束巻クはその部分に革や桜の樹皮などを巻き付けることをいう。マクに娶まクがかけてあるか。ナベは未詳。あるいは並メの意で割竹の類を補強の材に並べて縛ることを

いうか。（③四九六ページ）

すなわち、「なべ」を「並べ」の意であると見ると、何を並べるのか、一向に要領を得ないことになる。この「なべ」はナブ（靡）の連用形で、「靡べ巻き」は、弓束の部分に革や樹皮などを押し付けるようにして巻くことをいうのではないか。全体に歌意の解しにくい歌であるが、少なくともナブ（並）の確例にはならない。

従って、次のような訓字表記の例は、ナム（並）と訓んでおくのが無難である。

ⓐももしきの　大宮人は　船並弖（フネナメテ）　朝川渡り　船競ひ　夕川渡る（万葉一・三六）

ⓑたまきはる　宇智の大野に　馬数而（ウマナメテ）　朝踏ますらむ　その草深野（万葉一・四）

なお、ⓑの歌の表記から、ナム（並）には「数える」の意味もあったかのように説く向きもあるが、それは当たらない。この場合の「数」字は、馬を数多く連ねたことを表すための用字と考えるべきである。

辞典類に引かれた平安時代のナブ（並）の用例も、当初の形のままかどうか確実ではない。

○こまなめて　いざみにゆかむ　ふるさとは　雪とのみこそ　花はちるらめ（古今集・一一一・日本古典文学大系〈底本＝梅沢本〉）

『大日本国語辞典』（「なぶ」の項）は、右の「なめ」を「なべ」とする本文によって、ナブ（並）の用例としている。もっとも、『校本古今和歌集』によれば、「なへ」の本文をもつものとして、「亀山切」（伝藤原行成筆）や「昭和切」（藤原俊成筆）などが挙げられている。久曽神昇『古今和歌集成立論・資料編』によれば、前者は堀河朝（一〇八六～一一〇七）あたり、後者は文治五年（一一八九）前後とされているから、遅くとも平安時代末期には既にナブ（並）の形があったと見てよかろう。

○やどもせに　植へなめつゝぞ　我は見る　招く尾花に　人やとまると（後撰集・二八九・新日本古典文学大系〈底本＝高松宮旧蔵本〉）

『大言海』（「なぶ」の項）は、右の「なめ」を「なべ」とする本文によって、ナブ（並）の用例としている。しかし、『後撰和歌集総索引』所収の「本文綜覧」によれば、代表的な写本六本（天福本・中院本・貞応二年本・堀河本・二荒山本・片仮名本）のいずれも「なめ」であるから、「なべ」は後世の転写による形態であろう。

○御くるまどもして、ふねあみてすへてわたり給ぬ。（宇津保・祭の使・古典文庫〈底本＝前田本〉四〇七ページ）

『（小学館）古語大辞典』（「なべすう」の項）は、日本古典全書本（二・一〇〇ページ）によって「舟なべすゑて」とする。しかし、前田本では右のようになっており、前田本を底本とする新編日本古典文学全集『うつほ物語』（①・四六五ページ）では、「舟あみ据ゑて」として「舟を連結して（その上を車で渡る）」の意に解している。結局、ナブ（並）の確例にはなり得ない。

○ここらめでたき人々を据ゑ並めて御覧ずるこそはうらやましけれ。（枕草子・二七八・日本古典文学大系〈底本＝岩瀬文庫本〉）

『大日本国語辞典』（「なべすう」の項）は、右の「据ゑ並めて」とある部分を「なべすゑて」の例として挙げているが、それは春曙抄本によったものであり、その基になった能因本では「なめすゑて」とある。なお、三巻本・前田本はいずれも「すゑなめて」である。

以上のように、諸辞典に挙げられたナブ（並）の用例は、いずれも確実な例とは扱いにくいものである。そのためか、最近の辞典では、それらの用例を排除する傾向にある。

ところで、辞典類を離れて、ナブ（並）の古例がいつまで遡れるかを考えると、次のような例が見いだされる。

○駒なべ〈那倍〉て　目も春の野に　交じりなむ　若菜摘み来る　人もありやと（新撰万葉集・上・一三・新編国歌大観〈底本＝寛文七年板本〉）

○こまなべて　めもはるののに　まじりなん　わかなつみつる　ひともありやと（古今和歌六帖・一一三七・新編国歌大

観〈底本＝宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本〉

○すまの関　秋はぎしのぎ　駒なべて　たかがりをだに　せでやわかれん（同・一一九九）

○秋かぜは　すずしくなりぬ　駒なべて　いざ野にゆかん　萩の花みに（同・一二二一）

○駒なべて　いざみにゆかん　ふるさとは　雪とのみこそ　花はちるらめ（同・一三〇〇）

『新撰万葉集』は九世紀末または一〇世紀初頭の成立、『古今和歌六帖』は一〇世紀後半の成立と考えられている。従って、もしその本文が成立当初の形を伝えているとすれば、一〇世紀にはナブ（並）が存在したことになる。

ここで人は、上代にも存したマ行音―バ行音間の交替の現象を持ち出すであろう。しかし、ナム（並）がナブ（並）に転じてしまうと、語形上ナブ（靡）と区別が付きにくくなる。平安時代になって、ナブ（並）の形が現れたのは、ナブ（靡）の方が使われなくなって、競合する相手がなくなったことと関係があろう。逆に言えば、上代にはナブ（靡）が存在したために、ナム（並）はナブ（並）に転じることが困難であったと考えられる。

以上のように見てくると、『古事記』における「かがなべて」の「なべて」を「並べて」の意と解することには、かなりの無理があると考えられる。すなわち、ナブ（並）の形が上代にまで遡るという蓋然性は低く、解釈として危険であると言わざるを得ない。

四

宣長説は、「かが」についても「なべて」についても無視できない難点があり、安んじて採用することは出来ない。そこで次に、宣長の否定した契沖説を見ることにする。契沖は『厚顔抄』において、以下のように言う。

物ヲ数フルニハ、指ヲカヽメ並ヘテヨム物ナレハ、カヽメヲ下略シタル歟、又、カウカヘナヘテトイヘル歟、万葉第一二、馬ナヘテヲ数而ト書タレハ、ナヘテハ数フルナリ（岩波版契沖全集第七巻四八一ページ）

前半（「屈め並べて」の転）を契沖A説、後半（「考へ並べて」の転）を契沖B説と呼ぶことにすれば、いずれも「なべて」の部分を「並べて」の意と取ることにおいて、宣長説と同様の疑問がある。

その上、契沖B説は、カムガヘナベテ→カウガヘナベテ→カガナベテのような、かなり無理な音変化を想定している。すなわち、カムガフ→カウガフの変化は平安中期以降と思われる上に、さらにへの脱落をも想定しなければならない。契沖B説は、まず捨ててよいと思われる。

一方、契沖A説は、「なべて」を「並べて」と解する点以外に、カガメナベテのメの脱落を考える点にも疑問が残るであろう。

そこで、まず「なべて」の方から解決することにすれば、形から言えば〈ナブ（靡）＋テ（助詞）〉と見るのがふさわしい。ナブ（靡）については、既に多少触れたが、「力を加えて押し伏せる」の意を表す。

①そらみつ　大和の国は　押しなべ〈奈戸〉て　我こそ居れ　敷きなべ〈名倍〉て　我こそいませ（万葉一・一）

②婦負（めひ）の野に　すすき押しなべ〈奈倍〉　降る雪に　宿借る今日し　悲しく思ほゆ（万葉一七・四〇一六）

③印南野の　浅茅押しなべ〈靡〉　さ寝る夜の　日長くしあれば　家し偲はゆ（万葉六・九四〇）

④我が宿の　尾花押しなべ〈靡〉　置く露に　手触れ我妹子　落ちまくも見む（万葉一〇・二一七二）

⑤紀伊の国の　昔猟夫（さつを）の　鳴る矢もち　鹿（しし）取りなべし〈靡〉　坂の上にそある（万葉九・一六七八）

②～④では植物を押し伏せることを言うが、①では国土を支配することを、⑤では動物を捕獲することを言っている。なお、これらは下二段他動詞の例であるが、四段自動詞と目される例もある。

⑥神風の　伊勢の国は　沖つ藻も　靡足波尓（ナビクルナミニ）　塩気のみ　かをれる国に　うまこり　あやにともしき　高照らす　日の皇子（万葉二・一六二）

「靡足」をナミタルと訓むのが現在の通説であるが、ナム（靡）の例は他に見いだせない。他動詞形がナブである以上、

自動詞形もナブであったと見るのが穏当である。

「かがなべて」の「なべて」が「靡べて」であるとすれば、「かが」は「屈む」と関係があると見るのが、意味的に素直な考え方であろう。しかし、動詞連用形カガメ（屈）の語尾メが脱落するというようなことは考えにくい。従って、このカガ（屈）は、下記の語に見られるように、クグとも交替する語基と考えるべきであろう。

○カガム　「屈申カカメノフル」（聖語蔵本願経四分律平安初期点）
○カガマル　「曲身低影　上可々末利、低可多夫久」（新訳華厳経音義私記）
○クグム　「跼　ク、マル　セク、マル〈上上○○○〉」（観智院本名義抄）
○クグセ　「背傴　世奈加久々世尓」（真福寺本霊異記訓釈・下・二〇）

情態的な意味をもつ非独立性の語基を、慣用に倣って「形状言」と呼ぶならば、〈形状言＋動詞〉の形を有する動詞としては、たとえば次のようなものがある。

○ウカネラフ〈ウカ（窺）＋ネラフ（狙）〉　「宇加涅良比」（万葉八・一五七六）
○サカノボル〈サカ（逆）＋ノボル（上）〉　「左香能保流」（万葉二〇・四四六一）
○サハマク〈サハ（多）＋マク（巻）〉　「佐波麻岐」（古事記・歌謡二三）
○シジヌク〈シジ（繁）＋ヌク（貫）〉　「之自奴伎」（万葉二〇・四三三一）
○シバタツ〈シバ（屢）＋タツ（立）〉　「之婆多知」（万葉二〇・四四六〇）
○ソダル〈ソ（具）＋タル（足）〉　「曽太礼」（仏足石歌・二）
○ソホフル〈ソホ（濡）＋フル（降）〉　「曽保零」（万葉一六・三八八三）
○タナグモル〈タナ（満）＋クモル（曇）〉　「棚雲利」（万葉一三・三三一〇）
○トドコホル〈トド（止）＋コホル（凝）〉　「等騰己保里」（万葉四・四九二）

○フホゴモル　ヘフホ（含）＋コモル（篭）〉「府保語茂利」（書紀・歌謡三五）

従って、カガナブ（屈靡）は、カガメナブからメの脱落した形というのではなく、初めからカガナブの形であったと見ることが可能である。意味は、「屈め伏せる・折り屈める」のようなものになる。

古くから、数を数えるのに指を折り屈めて数えたという点については、幾つも例証を挙げることが出来る。

○秋の野に　咲きたる花を　指折り（および）　かき数ふれば　七種の花（万葉八・一五三七）

○たゞひのへぬるかずを、けふいくか、はつか、みそかとかぞふれば、およびもそこなはれぬべし。（土左日記・正月二十日）

○手を折りて　あひ見し事を　かぞふれば　とをといひつゝ　四つは経にけり（伊勢物語・一六）

○秋ののに　さきたる花を　てををりて　かきかぞふれば　ななくさの花（古今和歌六帖・一二二二）

○指（および）をかがめて、「十、二十、三十、四十」など数ふるさま、伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ。（源氏物語・空蟬・新編日本古典文学全集①一二一ページ）

○山のおくに　およびををりて　数ふれば　あすより春も　めぐり来にけり（広本拾玉集・二六三七・新編国歌大観）

従って、「かがなべて」が「屈靡（かがな）べて」であって、指を折り屈める動作を意味するとしたら、それは数を数えるためのものであったと考えて、特に無理はないわけである。

五

さて、「かがなべて」を「屈靡（かがな）べて」と見る考え方について、どこに問題があるかと言えば、当該の歌の中に「指」（または「手」）という目的語が表現されていないことであろう。「屈め並べて」の転とする契沖A説に対して、宣長が引っかかったのはこの点である。

指を折て数ふることならば、指といはでは聞えず、何物とも云ずたゞ屈並と云て、いかで指のことならむ、万葉八にも、指折可伎数者などこそよめれ、（筑摩版本居宣長全集第十一巻二四八ページ）

土橋寛『古代歌謡全注釈　古事記編』は、

「屈並べて」で、指折り数える意とする説もあるが、それならば「指」の語を省くべきでなく、このことは『記伝』に説くとおりである。（一一八ページ）

と述べて、宣長説に従っている。

しかし、同じ『古事記』の歌謡の中に、他動詞に対して目的語が表現されていない例が、他にもある。ただし、次のような例は取り上げなくてよいであろう。

○天廻む　軽の嬢子　甚泣かば　人知り〈斯理〉ぬべし　波佐の山の　鳩の　下泣きに泣く（歌謡八二）

「知る」の対象は「泣く」ことであり、それは名詞句としては現れないが、「甚泣かば」という表現の先行から見て、現れなくて当然というケースである。また、「知る」の対象は「二人の仲」とも考えられるが、その場合は、表現されなくても了解可能な目的語として、省略されたことになる。

また、次のような例も、比較的多いケースである。

○倭辺に　西吹き上げて　雲離れ　退き居りとも　我忘れ〈和須礼〉めや（歌謡五五）

○さねさし　相模の小野に　燃ゆる火の　火中に立ちて　問ひ〈斗比〉し君はも（歌謡二四）

右の両歌の場合、丁寧に表現すれば「我君を忘れめや」「我を問ひし君はも」となるであろうが、このままでも特に不完全に感じないのは、相手や自分を指す語は簡単に補うことが出来るからであろう。しかし、次のようなケースになると、表現としてやや不完全に思えてくる。

○神風の　伊勢の海の　大石に　這ひ廻ろふ　細螺の　い這ひ廻り　撃ち〈宇知〉てし止まむ（歌謡一三）

この歌の「撃つ」に対する目的語としては、「敵」のような語が考えられるであろうが、それは表現されていない。

○倭辺に　行くは誰が夫　隠り処の　下よ延へ〈波閉〉つつ　行くは誰が夫（歌謡五六）

「延ふ」は他動詞であるから、「心」というような目的語が必要であるが、ここでは表現されていない。

○水溜まる　依網の池の　堰杙打ちが　刺し〈佐斯〉ける知らに　蓴繰り　延へ〈波閉〉けく知らに　わが心しぞ　いや愚にして　今ぞ悔しき（歌謡四四）

この「延ふ」に対しても、「手」という目的語が潜在していると考えるべきであろう。なお、「刺す」に対する目的語も表現されていないが、「堰杙打ち」という語の存在から、「杙」を補って考えるのが普通である。しかし、占有を表すという文脈からは、「杙刺す」でなくて、「標刺す」とあるべきであり、潜在する目的語は「標」であると考えられる。

○夏草の　阿比泥の浜の　掻き貝に　足踏ますな　明かし〈阿加斯〉て通れ（歌謡八六）

「明かす」は他動詞であり、目的語として「夜」があるべきところである。

なお、『万葉集』を見ると、次のような例もある。

○夢にだに　見えむと我は　ほどけ〈保杼毛〉ども　相し思はねば　うべ見えざらむ（万葉四・七七二）

右の「ほどく」に対しては、目的語として「紐」が表現されるのが、むしろ自然であろう。

○雨降らず　日の重なれば　植ゑ〈宇恵〉し田も　蒔き〈麻吉〉し畑も　朝ごとに　凋み枯れ行く（万葉一八・四一二二）

右の歌の場合、「植う」に対しては「苗」が、「蒔く」に対しては「種」が、それぞれ目的語として了解されていたと考えてよいであろう。

以上のように見てくると、他動詞に対する目的語が現れない場合、それが表現として不足なのかどうか、そこに一線は引きにくい。しかし、いずれにせよ、それが顕在的に表現されていなくとも、潜在する目的語が何であるかは、文脈

的に了解可能であると言える。逆に言えば、了解可能であれば、表現しないことがあっても良いことになる。特に歌の場合、歌形による制約があるから、そうしたことが時には起こり得るわけである。

問題になっている問答歌の場合、問歌においては、相手に数を数えることを要求している。それを受けた答歌において、「屈靡（かがな）べて」とあれば、それに対応する目的語が「指」（または「手」）であることは、十分に了解可能であると言えよう。

おわりに

以上、『古事記』歌謡中の「かがなべて」に対する従来の解釈には、見過ごしがたい欠陥があることを述べ、それに代わる私案を述べた。私案は、結果として契沖A説に近くなったが、契沖A説も、そのままでは採用できないものである。「かがなべて」に限らず、『古事記』歌謡の歌詞に関しては、従来の標準である宣長説が、厳密な検討を経ることなく、そのまま認められてしまっている場合が多い。たとえそれが結果的に正しいものであっても、現代の研究水準から見て批判に耐えうるものかどうか、一度は検討すべきものであろう。